

けやき



No. 624
2022.10.14

京大職組
文学部支部

2022年度支部委員会が発足しました。

共助の土台としての組合活動に!!

新支部長あいさつ

児玉 聡

文学部教職員の皆様、本年度、文学部支部の支部長を引き受けることになりました児玉です。思想化学系の専修の一つである倫理学専修の教員を務めております。これまで必ずしも熱心に組合活動をしてきたわけではない私に支部長が務まるのか、いささか心許なく思われる方もいらっしゃるのではないかと思います。ですが、副支部長のお二人はすでに支部長など要職を務めた経験のある教員であり、また支部委員のお二人も長く文学部支部の活動を支えている職員であるなど、支部委員会全体としては磐石の体制になっていると言えます。新支部長として皆様の意見や要望をできるだけ掬い上げ、われわれの職場をより働きやすい環境へ改善することに努めたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

2022年度の文学部支部では、時間雇用教職員の雇用制度見直しの問題に引き続き取り組むとともに、文学部支部の組合員数の拡大や組合活動の活性化に努めることで、労働環境の改善に向けて前進したいと思っています。

今年3月に私も学生の頃からお世話になっていた保健診療所が閉鎖されました。同僚の外国人教員は医療へのアクセスが大変困難になり、困っています。学生も同様でしょう。9月末には高等教育研究開発推進センターが閉鎖

されました。教授・准教授は学内の他部局に異動しましたが、特定教員、特定研究員、事務補佐員等のスタッフは退職し、自力で再就職できなければ失業保険を受けることになりました。上記センターの所管であったMOOC業務をTAとして手伝っていた文学部出身のODも、TAのバイトを8月末で打ち切られ、現在の仕事を探しています。

「一人では解決できない労働問題を共有しながら解決に向かう、それが大学という空間の中でできるのは組合以外にはありません。」

2021年度の文学部支部長を務めたミツヨ・ワダ・マルシアノ先生の言葉です。上記のような現実を目の当たりにすると、正にその通りだと思わざるを得ません。社会保障や防災の分野では、よく「自助・共助・公助」という言葉が出てきますが、不景気や合理化が理由で公助が削られようとしているとき、自助だけではどうしようもありません。とりわけ連帯が難しくなっているコロナ禍においてこそ、大学教職員の共助の土台としての組合活動が必要とされているのではないのでしょうか。

共助のためには、まず情報共有が必要です。例えば支援職員制度の話も、少し前の私を含めて多くの教職員は何が起きているのかほとんどわかっていませんでした。情報共有だけでなく、状況を改善するための方法を相談する場も必要です。そして、小さな力を集めて大きな力にするには、できるだけ多くの教職員の参加も必要です。労働環境のさらなる悪化を防ぎ、教員や職員にとってよりよい職場環境を作るには、共助の土台としての組合活動を活性化させる必要があります。そのような信念をもって、これから一年間文学部支部の活動を行っていきたいと思います。何卒ご協力よろしくお願ひ申し上げます。

研究科長と事務長へのご挨拶

今年度、支部長・副支部長が交替したことをうけて、8月9日午後、木津研究科長・上野山事務長と懇談を行いました。まず、改めて支部委員を紹介するとともに、これまでの組合との信頼関係に基づき、申し入れに応じて折衝交渉の場を設けていただくこと、組合との慣行事項などで変更がある場合は事前に連絡をしていただくこと、そして支部総会など組合活動での会議室の利用について、お願ひしました。

次いで、「支援職員制度に関する要望書」を手渡し、(1)支援職員に対する本部負担を恒久的なものとするよう大学本部に要望すること、(2)同一労働同一賃金の原則にのっとり、この支援職員制度を活用して、時間雇用の方々を採用すること、(3)本部負担の恒久化がすぐに実現しなくとも、支援職員の採用を進めること、(4)部局推薦型の支援職員採用に当たって試用期間における雇止めは行わないこと、(5)文学研究科で働く時間雇用の方々のためにこの制度の説明会を開催すること、をお願ひしました。これに対して、研究科長からは、この制度について勉強しながら、何ができるかを考えていきたい、とのお答えがありました。また、事務長からは、時間雇用の方々の待遇改善の必要性は感じている、とのお答えがありました。



2022年度支部委員会メンバー

支部長	児玉 聡
副支部長	伊勢田 哲治 米家 泰作
支部委員	福村 輝美 似内 奏子
中央執行委員	大河内 泰樹 川島 隆 千田 俊太郎
けやき編集	川島 隆 杉山 卓史 成田 健太郎

よろしくお願ひいたします。